

A Study on the Difference between the “Te-Form” and the “Renyo-Form” : From the Viewpoint of Japanese Language Education

Yukiko Muramatsu

Abstract

In this paper, I examine the difference between the “te-form” and the “renyo-form” of Japanese verbs. The difference between the “te-form” and “renyo-form” is traditionally treated as a difference between the written and the spoken language. On the other hand, some previous studies argue that there is another difference between these two forms, like “Tatte, gohan o taberu” and “*Tachi, gohan o taberu,” for example. This paper focuses on the adverbial elements and shows that the “renyo-form” can also be used if more than one adverbial element is added to the “renyo-form” in an unnatural sentence. For instance, “Tachi, nagameteita” is an unnatural sentence. However, adding “Shonbori” creates the natural sentence “Shonbori tachi, nagameteita.” The “renyo-form” parallels the following verb, and the adverbial elements clarify this relation. This paper suggests that Japanese language educators should explain that the “renyo-form” is hard to use without adding any adverbial element in the case of attendant circumstances.

テ形接続と連用形接続の差異に関する一考察

－日本語教育の視点から－

村 松 由起子

1. はじめに

テ形接続と連用形接続（以下テ形・連用形）については、伝統的な日本語学では文体的な違いとして基本的には差異がないと考えられてきた。また、日本語教育においても一般的に話しことばと書きことばの違いとして扱われている（庵他（2000:p.191）、日本語教育学会（2005:p.163））。その一方、文体以外の差異に言及した研究（構文論グループ（1989b）など）や使用実態の差を計量的に分析した研究（林（2004）など）もあり、文体的な差異だけではないことも指摘されている。

1) は構文論グループ（1989b：p.166）からの用例であるが、bの連用形「たち」は言えないとされている。

1) a. たって、ごはんをたべる。（下線部筆者）

b. *たち、ごはんをたべる。（下線部筆者）

また、2) は市川編（2010：p.770）からの日本語学習者の誤用例であるが、2) aのようにテ形を使うべきところに連用形を使用してしまう誤用が観察されることから、テ形・連用形の差異は文体の違いのみでは説明しにくいであろう。2) aについて市川編（2010：p.773）は、付帯状況の場合は「て」を使うと解説し、bを正用としている。

2) a. *集中し勉強に取り組むために、試験がよくできた。（下線部筆者）

b. 集中して勉強に取り組んだために、試験がよくできた。（下線部筆者）

テ形には付帯、継起、因果、並列の用法¹があるが、日本語記述文法研究会（2008:p.288）は、このうち付帯状況ではテ形が用いられ、連用形では継起の意味が強くなるとして、付帯状況では連用形が使用しにくいと述べている。2) の日本語学習者の誤用も付帯状況に連用形を用いている誤用に該当する。

そこで、本稿では、日本語教育の視点からテ形・連用形の差異を再考し、日本語教育としてテ

形・連用形の差異をどのように扱うのが適切かを考えてみる。考察は、①話しことば・書きことばにおいてテ形・連用形にどのような使用差が見られるか、②書きことばであっても連用形が使用しにくいとされる付帯状況について、日本語教育では先行研究の指摘をどのように扱うのが適切か、の2つの点から行うことにする。なお、①については、すでに林（2004）などの先行研究で文章・文体の種類による差異が調査されていることから、本稿では語彙レベルでの話しことば・書きことば性との関連を調べることにする。また、テ形・連用形の誤用が問題となるのは主に記述された文章の場合であるため、本稿では話しことばとして話しことば的なブログを調査の対象とした。

2. 話しことば・書きことばにおけるテ形・連用形の差異

テ形・連用形の差異を話しことば・書きことばの違いとしてよいか、という問題に関しては、林（2004）が動詞「なる」のテ形・連用形の使用実態を分析し、その結果として単に文体的な違いだけではないことを明らかにしている。林（2004）の新聞・小説における「なる」の使用実態分析によると、「時などの変化、到来を表すもの」²は書きことばであっても、連用形よりも圧倒的にテ形が選択されるという。林（2004）は同一種類の文章におけるテ形・連用形の使用差を明らかにしているが、日本語教育において話しことば・書きことばを指導する際には語彙の選択も重要になる。話しことば・書きことばの違いは、語彙レベルでも見られるため、例えば、話しことば的な「買う」と書きことば的な「購入する」ではテ形・連用形の使用に差があるのかという点からも検証をする必要がある。同じ文体であれば、話しことば的な「買う」は「買って」の形で、書きことば的な「購入する」は「購入し」の形で使用されやすいであろうか。

本稿では、この語彙の話しことば・書きことば性とテ形・連用形の選択の関連性について、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」中の「Yahoo! ブログ」の用例を用いて、「買う」「購入する」を一例に検証してみた。今回、「買う」「購入する」を対象にしたのは、話しことば・書きことばの対³があり、ブログでも使用されやすい語彙だと考えたからである。用例の抽出は、中納言を用いて「特定目的・ブログ」、「ジャンル yahoo! ブログ」にて抽出した用例を一文ずつ確認し、「買う」「購入する」がテ形接続、連用形接続として用いられている用例のみを抽出した。

表1は調査結果である。

検索語	形式	用例数	テ形：連用形	4形式中の使用率	各動詞の使用率
買って	テ形	160	61.1%：38.9%	53.9%	88.2%
買い	連用形	102		34.3%	
購入して	テ形	19	54.3%：45.7%	6.4%	11.8%
購入し	連用形	16		5.4%	

表1 Yahoo! ブログにおける「買う」「購入する」の使用数（テ形接続・連用形接続の場合）

「買って」「買い」と「購入して」「購入し」の使用率の計はそれぞれ 88.2%、11.8%であり、話しことば的な「買う」のほうが圧倒的に使用率が高かった。4 形式中、最も使用率が高かったのは「買って」で 53.9%、最も低かったのは「購入し」で 5.4%だった。ブログにおいて、話しことば的な「買う」のテ形の使用率が高く、書きことば的な「購入する」の連用形の使用率が低いという結果は、従来のテ形・連用形は話しことば・書きことばの違いであるという説明と矛盾しないが、同じテ形でも「買って」が 160 例だったのに対し、「購入して」は 19 例しかなく、語彙レベルで書きことば的な「購入する」はテ形であっても使用数が少ないことが確認できた。一方、「購入して」と「購入し」にはあまり使用差が見られなかったことから、話しことば的な文体では、書きことば的な語彙はテ形・連用形ともに使用が少なくなり、テ形・連用形の話しことば・書きことば性よりも文体の影響を受けやすいことが窺えた。

以下、用例を 1 例ずつ挙げておく。

- 3) お店に入るよりも、お弁当買って、車の中のテーブルで食べたほうがくつろげるものね。
- 4) コロッセオとの共通券を買い、フォロロマーノの中に入ってみました。写真 2 これがセヴェルス帝の凱旋門ね。ふむふむ。
- 5) 今回、ニューデジを購入して、ISO 機能とやらが付いているのに気が付きました。
- 6) 家電量販店にて DVD とビデオ tape を購入し、あと component 等々のカタログを貰った後で居酒屋さんで夕食ですよ！

語彙とテ形・連用形の選択の関連性について、さらに論文などでも使用される書きことば性の高い「述べる」についても調べてみたところ、表 2 のように、コーパスの全ジャンルでは「述べて」106 例、「述べ」618 例と、連用形「述べ」の用例のほうが明らかに多かった。話しことば的なブログに限定してみても、連用形「述べ」のほうが、テ形「述べて」よりも用例数が多く、書きことば性の高い語彙は文体にかかわらず、連用形で使用される傾向が見られた。

検索語	出典	形式	用例数	テ形：連用形
述べて	全ジャンル	テ形	106	14.6%:85.4%
述べ	全ジャンル	連用形	618	
述べて	Yahoo!ブログ	テ形	5	13.5%:86.5%
述べ	Yahoo!ブログ	連用形	32	

表 2 「述べる」の使用数

以下、Yahoo! ブログからの用例を 1 例ずつ挙げておく。

- 7) DVD の話題で、本作が 9 枚目となり 15 歳から始めまして、うんたらかんとらと述べて、「全部持っている人！」と会場内へ問いたですが、手が挙がったか挙がらないかで司会者…

- 8) 「(給付金は) 私自身がどうするかはまだ判断をしていない。その時になって考える」と述べ、給付金を拒む姿勢からトーンダウン。

以上、語彙レベルでの話しことば・書きことば性とテ形・連用形の使用傾向との関連を「買う」「購入する」と「述べる」を用いて検証してみたところ、話しことば的な文体であっても、書きことば的な語彙は連用形で使用される傾向のあることがわかった。

日本語教育では、テ形・連用形の差異は主に話しことば・書きことばの違いであるとして扱われているが、何を基準に話しことば・書きことばを分けているのかは明確には示されていない。日本語学習者が「テ形は話しことば、連用形は書きことば」として学んだ場合、話しことば的な文体なのに連用形が用いられるケースがあると、疑問を抱いてしまう可能性もある。本稿で検証した「述べる」のように、話しことば的な文体であっても連用形で使用される傾向のある語彙については、話しことば・書きことばを学習する際に例示するのも一案であろう。

3. 付帯状況におけるテ形・連用形の差異

次に、先行研究において指摘されている、付帯状況の場合は書きことばであっても連用形が使用されにくいという点について、日本語教育ではこの指摘をどのように扱うのが適切かを検討する。

連用形が付帯状況としては使用されにくいことは前述のように日本語記述文法研究会(2008)などが指摘している。ここでは中野(1997)の調査をもとに、日本語学習者が付帯状況として連用形を用いた場合に誤用になるのかについて考えてみたい。

中野(1997)は、日本人大学生353名ならびに香港・韓国の日本語学習者90名を対象に、テ形・連用形のペア文を用いてどちらを支持するかという調査を行っており、その結果として、日本人の場合、付帯状況では以下9) 10) 11) (下線部筆者)のように連用形よりもテ形の割合が多いことを示している。なお、()内は連用形・テ形の両方を可能とした割合であり、支持した割合の総計は2つの割合の計となる。

- | | | |
|----------------------------------|-------|--------|
| 9) a. 私は <u>大</u> の字になって寝てしまった。 | 74.5% | (7.9%) |
| b. 私は <u>大</u> の字になり寝てしまった。 | 16.7% | (7.9%) |
| 10) a. 彼女は <u>眼</u> を開いて眠っている。 | 83.2% | (5.0%) |
| b. 彼女は <u>眼</u> を開き眠っている。 | 11.3% | (5.0%) |
| 11) a. <u>手</u> をたたいて選手団を迎えましょう。 | 85.8% | (4.2%) |
| b. <u>手</u> をたたき選手団を迎えましょう。 | 10.1% | (4.2%) |

9) については、両方も可能とした回答を含めると、24.6%がbの連用形を可能と判断しているため、仮に日本語学習者が連用形を用いたとしても誤用にはならないであろう。10) については、「眼を開いたまま眠る」という状況そのものに違和感が感じられるため、違和感による判定への影響も排除できない。11) については中野自身が、「「～ましょう」という提案、勧誘の表現には連用形接続よりもシテ形接続のほうが馴染む」(p.111)と述べているように、付帯状況に

外に文末表現の要素が関わっている文のため、分析がしにくくなっている。また、11) については、次の 12) のように実際に「手をたたき」が付帯状況として用いられている用例もあることから、連用形自体は付帯状況として用いることが可能であることがわかる。

- 12) 周囲ではだれもが座席から立ちあがり、手をたたき、歓声をあげていた。(アフリカゾウを救え)

したがって、連用形は付帯状況としては使われにくいというのは傾向であって、連用形を使用した場合に誤用になるかという観点から見た場合、このテ形・連用形の差異は問題性が低いと考えられる。

さらにもう一点、先行研究で指摘されているテ形・連用形の差異について考察してみる。構文論グループ(1989ab)では「立つ・すわる・しゃがむ」などの様態を表す動詞を「ふるまい動詞」と呼び、「ふるまい動詞」は「たって、ごはんをたべる」「あるいて、川をわたる」とはいえても、「*たち、ごはんをたべる」「*あるき、川をわたる」とはいえないとしている(p.166)。

この指摘は先の 9) 10) 11) よりも非文性が高い問題であり、日本語学習者が「たち、ごはんをたべる」を用いた場合は誤用として扱われてしまうであろう。では、「たち」「あるき」の連用形は付帯状況としては使用することができないのであろうか。

13) は構文論グループ(1989a: p.27)の用例であるが、まず、この用例中にある「たって、ながめていた」を用いて 14) で考えてみる。

- 13) ポンポン音がする。煙は風におくられて、柳の花のように垂れ下がった。三吉はシヨンボリたって、ながめていた。(家下)(下線部筆者)

- 14) a. たって、 / b.?? たち、ながめていた。

c. シヨンボリたって、 / d. シヨンボリたち、ながめていた。

動詞「たつ」に何も付加せずに使用している b のみ不自然な文となり、連用形であっても d のように副詞的要素として「シヨンボリ」を付加すると違和感がなくなることがわかる。

このことから、以下、付帯状況のテ形が使えて連用形が使えない場合を、副詞的要素(場所を含む)の付加に着目して、考察してみる。

次の 15) 16) も構文論グループ(1989a:p.27)の用例であるが、13) 同様、15) 16) (下線部筆者)でも動詞「すわる」に何も付加せずに使用している 17) 18) の b のみ不自然になり、副詞的要素「きちんと」や場所の要素「道ばたに」を付加した 17) 18) の d は連用形でも不自然さが感じられない。

- 15) 翌る朝目をあくど、駒子が机の前にきちんとすわって、本をよんでいた。(雪国)

- 16) 里子が道ばたにしゃがんで、近所の女の子たちのままごとをながめていた。(山音)

- 17) a. すわって、 / b.?? すわり、本をよんでいた。

c. きちんとすわって、 / d. きちんとすわり、本をよんでいた。

- 18) a. しゃがんで、 / b.?? しゃがみ、ながめていた。

c. 道ばたにしゃがんで、 / d. 道ばたにしゃがみ、ながめていた。

ではなぜこれらの要素が加わると違和感が軽減されるのだろうか。

構文論グループ（1989 b :p.164）、益岡（2013:p.178）などの先行研究で指摘されているように、連用形の場合、二つの動作は対等で並列的であるため、動詞に何も付加しないで使用すると並列性により付随する動作としての付帯状況としては成り立ちにくい。そのため付帯状況としての解釈がしにくい**b**は不自然であるが、先行動詞に副詞的要素（場所を含む）を付加することによって、先行する動作に状態性や維持性が付加されることになり、成立しやすくなると考えられる。

19) 知花は吹山の席の右側に立って、直立不動の姿勢をとった。（夕焼け探偵帖）

20) 黄色いベスト姿の住民が街角に立ち、児童を見守る。（毎日新聞）

これらの用例ではテ形から連用形、連用形からテ形への変換が可能である。20)の場合、「立つ」という状態が維持されているという解釈がしやすくなることにより、連用形「立ち」も成立する。

つまり、動詞のみをいわゆる裸の状態にしたままで付帯状況として使用するの難しいが、副詞的要素の付加によって付随する動作が維持されているという解釈がしやすくなれば、連用形でも成り立つと考える。

それでは、前述の日本語学習者の誤用 2) a のケースも副詞的要素を付加すれば成り立つのであろうか。次の 21) で考えてみる。21) ab は 2) ab の再掲である。

21) a. *集中し勉強に取り組むために、試験がよくできた。

b. 集中して勉強に取り組んだために、試験がよくできた。

市川編（2010）では**b**のテ形「集中して」を正用しているが、このケースでも次の**c**のように「じっくりと」などを付加すれば連用形「集中し」でも成立しやすくなるであろう。

21) c.? じっくりと集中し勉強に取り組んだために、試験がよくできた。

ただし、この 21) c の場合、やや違和感が感じられる。21) の場合、「集中して」は動作というよりも、「集中して」自体が「しっかり」などの副詞のように「勉強する」を副詞的に修飾していると考えられることから、連用形「集中し」が使いにくいと思われる⁴。次の 22) では「集中する」が主節の動作とは別の動作であることが明確なため、付帯状況であっても連用形の「集中し」が成立するのであろう。

22) 運転に集中し、安全運転を心掛けるしかありません。（Yahoo! 知恵袋）

同様に副詞的要素を付加しても不自然なケースとして、「黙る」がある。成田（1983 : p.138）は「黙る」を様態動詞のうちの「状態をあらわすもの」としている。23) a は成田（1983）の用例であるが、a のテ形を連用形にした**b**、並びに「じっと」を付加した**c**には、ともに不自然さが感じられる。

23) a. 暁子は黙って / b.?? 黙り 頭を下げた。（a は成田（1983:p.138））

c.? 暁子はじっと黙り頭を下げた。

23) c に不自然さが感じられるのは、「黙る」そのものに状態性があるため、動作の維持としての解釈がしにくいからであろう。

連用形「黙り」でも、24) のように「話すのをやめる」という変化の意味が明確であれば継起

として問題なく成立する。

24) 暁子は急に黙り頭を下げた。

つまり、21) 23) cのように、副詞的要素を付加しても違和感が生じるのは、先行する動詞が独立した動作としての解釈がしにくい場合だと考える。

以上の考察から、先行研究で指摘されている付帯状況には連用形が使用されにくいという点については、実際には付帯状況に連用形を用いても誤用にはならない場合が多いが、付随する動詞の動作性が弱い場合は連用形が使用しにくいと考える。

4. まとめ

本稿の考察により、テ形・連用形の差異について、以下の点が明らかになった。

1. 話しことば的であるブログの用例を用いて、「買う」「購入する」「述べる」を例に、テ形・連用形の使用実態を検証してみたところ、「購入する」「述べる」など書きことば性が高い語彙の場合は、話しことば的な文体であっても、連用形が使用されやすいことが示唆された。
2. 付帯状況の用法で連用形が使用できないと指摘されている場合でも、副詞的要素が付加されていれば、連用形も成り立ちやすくなるが、先行する動詞の動作性が低い場合は、連用形に副詞的要素を付加しても付帯状況としては成り立ちにくい。この点を日本語教育の視点から捉えると、付帯状況の場合は連用形を裸で用いないこと、「黙る」「集中する」などの動作性の低い動詞の場合は連用形が使いにくいことに留意すればよいと考える。

【注】

- 1 日本語記述文法研究会（2008）ではこの4つの用法以外に「対比」「前触れ」「逆接」「順接条件」の用法も挙げられているが、吉永（2012）は先行研究を統合した結果として、最も普遍的であるこの4つの用法にまとめている。
- 2 「時などの変化・到来を表すもの」は、仁田（1995）の「付帯状態」「継起（時間的継起・起因的継起）」「並列」の3類4種の枠で分類した場合は、「付帯状態」に含まれるとしている。p.347
- 3 ただし「反感を買う」など置き換えができない慣用的な表現もある。
- 4 「慌てて」など、テ形が副詞化しており、「慌てて食べる」のようにテ形が副詞的に用いられる語彙もある。

【参考文献】

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 市川保子編（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- グループ・ジャマシイ編（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 言語学研究会・構文論グループ（1989a）「なかどめ一動詞の第二なかどめのばあい」『ことばの科学2』むぎ書房 pp.11-47
- 言語学研究会・構文論グループ（1989b）「なかどめ一動詞の第一なかどめのばあい」『ことばの科学3』むぎ書房 pp.163-179

- 澤西稔子 (2003) 「動詞・連用形の性質」日本語・日本文化第 29 号大阪大学 pp.47-66
- 社団法人日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- 中野はるみ (1997) 「シテ接続と連用形接続の使用の実態—中級日本語学習指導のために—」『留学生教育』第 2 号 留学生教育学会 pp.105-119
- 成田徹男 (1983) 「動詞の「て」形の副詞的用法—「様態動詞」を中心に—」『副用語の研究』渡辺実編 明治書院 pp.137-158
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」『複文の研究 (上)』仁田義雄編 くろしお出版 pp.87-126
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6』第 11 部複文 くろしお出版
- 林雅子 (2004) 「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究—新聞・小説における「なる」の用法を中心に—」計量国語学第 24 巻 7 号 pp.325-349
- 林雅子 (2007) 「動詞のテ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究—新聞・論述文・小説における語彙調査の結果から—」龍谷大学国際センター研究年報第 16 号 pp.49-58
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 吉永尚 (2012) 「テ形節の意味と統語」『活用論の前線』くろしお出版 pp.79-114

【用例出典】

KOTONOA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」